

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2021年06月10日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川陣場下
 41番地 齋オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩渕 宣輝 専務理事 小原 守夫 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

コロナ禍に翻弄されている2021年も半分が経過しようという季節。豪雪の冬、早すぎる春の到来、西日本では早々と5月の梅雨入り。夏前の長雨と集中豪雨が心配されるこの頃ですが、コロナ禍はこの先もまだまだ収束の気配を見せず、感染予防に気を抜けません。戦史館会員は高齢者が多数を占めていますが、ワクチン接種の進み具合が時候あいさつの定番になってしまいましたね。皆様お住まいの地域はいかがでしょう。

アイブラボンディ島 仮安置遺骸 お引越し

戦史館は例年ならば9月に通常総会を開催していますが、昨年に続き今年も、書面議決による総会という方向へ、理事のみなさんの意見がまとまりました。9月中旬に送付予定の戦史館だより123号に事業報告や収支報告の議案を掲載し、この号に同封する葉書に議案の賛否やご意見を書いていただく方向で進めます。

戦史館も構成メンバーになっている遺骨収集推進協会では、硫黄島派遣を除き、海外での活動はストップしたまま。遺骨収集推進法では2024年までを『実質取組み期間』として推進協会が2016年に発足したのですが、なかなか成果を上げられないうちに、もうすぐ5年が経過します。その後のことは不明です。コロナが収束すれば2015年に収容して仮安置されたままの遺骸120柱だけでも早々にインドネシアの法医学者の鑑定を経て、日本へ連れ帰りたい…会員の皆さんから期待が寄せられていますが、その前にいくつものハードルがあることはこれまでも度々お伝えしたとおりです。

2020年2月に厚労省と日本大使館が現地パプア州へ『周知活動』という名で派遣されたものの、何の進展も無いまま、その後はコロナで渡航不可になってしまいました。

周知活動の次には遺骨収集推進協会による現地調査、インドネシアの考古学者による事前調査へと続くはずでしたが、さらに無理難題が降りかかってきました。今安置されている遺骸をジャカルタへ運んでDNA鑑定をするのだそうです。その理由は2019年ロシアの遺骨収集で（概要は戦史館だより117号）日本兵以外の遺骨が多数混入していた事件で、デタラメな仕事ぶりをメディアに批判された厚労省が、海外から日本に帰還する全エリアの遺骨のDNA鑑定を決めたからです。これは遺族と遺骨の照合をする鑑定ではありません。

“アツモノに懲りてナマスを吹く”か。

難題ばかり続きますが、それでも推進協会からパプア州の現地協力者3名に、漸く送金できたことで、現地では遺骸仮安置設備の改善に動き出すことができました。さっそく、ムサキ島、アイブラボンディ島（写真提供カフィアール氏）で仮安置された遺骸のお引越しが行われました。



基地建設埋立て用に沖縄戦激戦地の土砂を？

コロナウィルス感染爆発のニュースが続き、沖縄の感染者数の異常な増加が目立っていますが、6月23日の沖縄慰霊の日が近づいてきました。

コロナ関連ニュースに隠れてしまいがちですが、名護市辺野古で進められている米軍普天間飛行場の辺野古移設の工事に、沖縄激戦地の土砂が使われる可能性が出てきました。工事で軟弱地盤が見つかり、多量の土砂を投入する設計変更が必要になり、防衛省は埋め立て工事に使われる土砂を採掘する候補地として、沖縄本島の南部地区をあげました。

南部地区は沖縄戦の最激戦地で、現在も遺骸の収容活動が続いています。太平洋戦争末期に「本土防衛の捨て石」にされた沖縄で、戦後処理が全くなされないまま、今も基地が集中する沖縄で、今度は戦没者を“人柱”にしようか?!?!

先の大戦で軍隊が民間人を守らなかったという事実を、大方の日本人は忘れてしまったのでしょうか？辺野古移設には沖縄県民の7割以上が反対したのに、日本政府は「唯一の解決策」と工事を強行し、今回も「南部で採取する場合は遺骨に十分配慮して行われる」と、いつものあの方のあの口調の答弁でした。

沖縄の遺骨収集に詳しい有馬咲子さんに現場のナマの声をききました。有馬さんは戦史館の理事お父さんはビアク島で亡くなっていて、パプア州への遺骸捜索や遺骨収集に度々参加していますが毎年2月には沖縄で20数年に渡り、遺骨収集ボランティアを続けています。



「沖縄戦から75年以上歳月が過ぎ、住民の四分の一が亡くなった激しい戦闘も、歳月が拭い去ったのでしょうか。平和な海、清い島には基地は不要だと思います。まして基地を作るために遺骨が混じっているかもしれない土砂を埋め立てに使うなんて信じられません。それでなくても、経年で遺骨を手にとるとハラハラと砕けて土に還る。そんな土が混じっている土砂を埋め立てに使うことは、絶対止めるべきです。沖縄戦を体験した人は90歳以上で数が少ない。死者は無言のまま。意のある人が声を上げなければ死者はうかばれません。沖縄の人は優しく、戦で一家全滅した人の屋敷跡を、いまだに維持管理しています。頭が下がります。戦争で親を亡くした私達だけでも忘れないでいようと思っています。」

〔うちな一のいくさのあとをほりさがす 老いも若きも力あせて 〕

〔手にとれば はらはら砕く骨悲し 歳月を経し遺骨収集 〕

2016年、有馬さん18回目の参加の遺骨収集報告集から一部分も紹介します。

「真栄平の南北の塔の壕へ。明かりを当てると積み上げられた骨の山、5名で土嚢袋に入れる。通路にしているところに座り込み土を掘ると大腿骨や小さな骨が次々出てくる。どうか見つけてほしいと骨が伝えているかのように。骨も積まれて歳月を経て、持ち上げるとカタチはあっても小さく砕ける。土に還ろうとしている。ここの土は骨と同化している。戦の世のことを知り、語り継がねばここにねむる多くの人うかばれない。」

安島太佳由さん 最新写真集『ベトナムへ』

コロナの影響で写真展も講演も開催が難しい今、戦史館会員で日本の戦争をテーマに、戦跡を撮影し続けている安島太佳由さんが、写真集『ベトナムへ』を出版しました。安島さんは、ベトナム戦争の最前線で取材を続けた報道写真家の石川文洋氏との出会いがきっかけに、ベトナムを再び訪ね、戦跡、人々の暮らしを新たな視点で記録しました。表紙写真 虐殺事件の足跡を再現した道（ソンミ村） 裏表紙写真 ディエンビエンフー



1 ページ目は訪問地、2 ページ目は戦死したカメラマン・ジャーナリストたち。3 ページ目は車窓から眺めるのどかな田園風景のショット…エッ？その場所はそのソンミ事件があった付近。世界を震撼させたあのカーリー中尉のあの事件の村。50年以上経過して撮影された風景から、あの時代を巻き戻し、ベトナム戦争以前の風景ものどかだったろうかと、想像が広がる写真。A 5 サイズ65ページに組まれた写真はすべてモノクロ。安島さんが原点に立ち戻って取り組んだ様子がひしひし伝わる写真たちです。

写真集のまえがきの「私の記憶の中にあるベトナム戦争は小学校高学年から高校生の頃ニュース映像であったり反戦運動だったり ただただ遠い国の出来事…」と始まる文章に同様の体験を思い出しました。朝鮮戦争後に生まれ、テレビが家庭に普及し始めた頃の子供たちにとって毎日夕方のニュースに流れるベトナム戦争はテレビの中の出来事で、その後フォークソングと結びついた反戦運動がブームだったけれど、沖縄からベトナムへ向かう戦闘機が沖縄の基地から出撃していたなど想像すらできませんでした。1975年4月サイゴンが陥落して、その後どうなったかも。改めて写真集のページをめくりました。

ベトナム戦争集結30周年の2005年に初めてベトナムを訪問したという安島さんも同様だったかもしれない。当時のベトナムは経済成長著しい頃で「戦争とは結びつかない印象をもった」とのコメントに、突如ドイモイという当時耳にしたことばを思い出しました。

2019年から2020年初頭に新たな気持ちでベトナムを訪れた安島さんが今回発表した1枚1枚を最後まで観終えると、それは戦場の最前線でない、戦跡という時間の流れがあり、人々の今の暮らしがあり、人々のこれからのありようを問い掛けてくるようでした。コロナ禍でじっくり観たいオススメの1冊。安島太佳由写真集『ベトナムへ』ご希望の方は直接携帯、メール、郵便振替で。TEL090-1030-6827 メール:photo@yasujima-takayoshi.com

郵便振替口座 00160-6-386400 加入者名「安島太佳由」1冊本体消費税送料込、1400円

(参考：2017年以降の安島太佳理由写真集「インドネシア戦跡巡礼」「昭南島・シンガポール」「太平洋戦争激戦地慰霊祭」)